統　計　教　育

茨城県教育研究会
統計教育研究部長
大　津　和　泉

茨城県統計課のお骨折りにより，統計教育推進校５校の研究成果がまとまり，統計教育推進校研究集録として第二回の刊行を迎えたことは，統計教育振興のうえから大へん喜ばしいことである。

県下５ブロック内にそれぞれ推進校を設け，その推進校を中核として研究を進め，近隣の学校の意識を高め振興を図ろうとする施策は，昨年度から実施されたもので，県統計課，県統計協会，県教委指導課及び県統計教育研究部の共催の事業である。しかもこの四者が相提携して補助金を出したり，指導者を送ったり，あるいは事業を責任もって進めたりして，青少年の統計的観念を高めようと努力しているのである。従ってブロック内の統計教育研究協議会においては，教職員の心の中に「誰でも気軽に参加して多くの問題点を解明し，悩みを訴えよう」という気楽さがあり，のびのびと協議され，時間の不足が感ぜられる程であった。

私ごとでまことに恐縮であるが，私の学校も推進校に委嘱されたので，その研究経過の一端を述べてみたい。統計教育とは何か。どんなことを学習指導でとりあげたらよいか。そしてどのような順序で仕事を進めたらよいか。こんな初歩的なことを県教育庁の宮本指導主事から指導を受けた結果，誰でも統計の指導をして来たが，ただ意識をもって，系統的組織的に指導していなかっただけであるということがわかり，12月までにやれるだけのことをやってみようということになった。次のようなことを行なった。

(1) 全職員が統計教育についての共通理解をもち，学校全体としての研究態勢をとること。全員研究授業を行ない，講師の指導を受けた。児童会や生徒指導，保健指導などの際は，調査や統計グラフの活用をはかった。

(2) 算数及び学級指導の系統表を作成した。

(3) 全国統計教育研究大会富山大会，関ブロ統計教育指導者研修会及び統計教育指導者講習会に職員を派遣した。

この研究協議会を終了して職員の感想を聞くと，異口同音に「大へん勉強になった。児童会やクラブ活動，生徒指導，保健指導などで，子どもたちが調査を行なうようになったり，統計図表を活用するようになった。そしてそこから結論を導き出そうとするようになった。」あるいは「統計教育というと何か固苦しく感ぜられたが，子どもたちが何らの抵抗なく，興味深くやっているので，教師の方がかえって教えられた。」などと喜んでいた。平戸貢前部長が「うまいか，うまくないか食べてみないとその味はわからない。俗にいう食わずぎらいというのが統計教育であろう。」といっておられたが，まことに至言である。

このことから，私は統計教育を学校教育の中にとり入れた頃のことが想起される。

統計教育の発端は，昭和21年来日したアメリカ統計使節団のライス報告で，その報告書の中には「日本は，普通教育制度を利用して民衆の間に統計的観念を養成しなければならない。」と勧告している。この勧告が出るようになった背景としては，

(1) 日本の統計水準が低く，利用できる統計資料がじゅうぶんでなかったこと。

(2) ほとんどの日本人が数字よりも勘によってものごとを判断することが多く，欧米人より客観性，合理性，実証性を尊重しない国民であったこと

(3) 民主社会に生きるためには，統計的素養が必要で，このことは幼少の頃から統計に親しみ，教育せられなければならないこと

(4) 学校卒業後，官庁や民間企業などに勤務した時，調査や統計が多く使われているから，学校教育においても統計教育をとりあげる必要があること

私たちは，この原点にかえって統計教育の必要性及び重要性を再認識し，ものごとを客観的，合理的，実証的に判断し行動できる人間の育成に精進すべき義務を負うものである。統計研究資料が多くの方々に読まれ，活用されることを望むものである。そして統計教育の振興がはかられるよう心から念願して止まない。